
オオバコ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オオバコ

【Nコード】

N6028Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

カブトムシの太郎と二郎は喧嘩ばかりしています。けれど二郎は次の日には喧嘩での怪我が治っています。それはどうしてか。新紀元社の花の神話という本にあったお話からヒントを得た作品です。

オオバコ

オオバコ

カブトムシの太郎と二郎がです。今互いに言い合っていました。

「どうしてもっていうんだな」

「そうだよ」

お互いに言い合います。彼等は森の中で喧嘩をしています。

「だって君が悪いんじゃないか」

「僕が悪いって？」

「君がだよ」

二郎が言います。

「君があの時あしたから」

「ああしたからって。あの方はだね」

「けれど言ったじゃない」

また話す二郎でした。

「そうだろ、あの方」

「それはね」

太郎もこのことは認めるしかありませんでした。

「言ったよ」

「ほら、言ったじゃないか」

「けれどそれが悪いっていつのかい？」

「うん、悪いよ」

その通りだと言う二郎でした。

「だから君が悪いんだよ」

「いいや、僕は悪くないよ」

太郎はムキになって二郎に言い返します。その角を振りたてながらです。

「僕はね。絶対に悪くないよ」

「けれど君がやったんじゃないか」

「どうしてもって言うのかい」

「言うよ、何度でもね」

「二郎も引きません。」

「言ってやるよ。本当に」

「そうかい、それだったらね」

太郎の言葉に剣呑なものが宿りました。

「もういいよ」

「諦めたんだね」

「諦めるものか。もうこうなったら」

ムキになった声でした。

「僕にだって考えがあるからさ」

「考えだつて？」

「言葉で言つて駄目なら」

太郎はその角をまた振りかざします。そのうえでの言葉でした。

「これだよ」

「やるつてのかい」

「そうさ、やるさ」

二郎に対してこう言います。

「いいかい？ やつてやるさ」

「そうかい、それならね」

「受けるんだね」

「受けてやるさ」

二郎は強い声で返します。

「それじゃあ、いいね」

「よし、じゃあ」

こうしてです。太郎と二郎が喧嘩をはじめました。

何度も何度も戦います。太郎も二郎も引きません。お互いに傷だ

らけになつてもです。それでも喧嘩を続けるのであります。

けれどその日は決着がつかずです。二郎が言ってきました。

「今日はこれで終わりにしないかい？」

「逃げるのかい」

「違うよ、また明日だよ」

明日続きをするというのです。

「また明日。続きをしよう」

「そう言うんだね」

「それでいいよね」

ムキになった感じで太郎に言います。

「明日で」

「いいさ。もうね」

太郎もかなり疲れてきました。それで二郎の言葉に頷きました。

そうしてこの日はお互い引いて身体を休めました。そして次の日太郎は寝て怪我を癒して昨日喧嘩をした場所に来ました。そこに二郎がやって来ました。その二郎の姿を見てみるとです。

何と怪我一つありません。綺麗なものです。太郎はその二郎を見て驚きの言葉を出しました。

「怪我が全部なおってるって」

「ははは、僕は特別なんだよ」

二郎は笑って太郎に話します。

「だからなんだよ」

「特別って？」

「そう、特別なんだよ」

こう話します。

「だからこうして怪我だつてね」

「全部なおつたつていうのかい」

「そうさ。それでどうするんだい？」

「それでもいいさ」

太郎はまだ傷が全部癒えてはいません。しかしそれでもです。喧嘩を止めるつもりはありませんでした。それを続けることにしました。

それで喧嘩を再開します。けれど傷が残っていてそれで彼は不利

なまま終わりました。そうしてその結果です。昨日よりも酷い傷を受けました。

第二章

二郎も傷を受けていますがそれでもです。太郎のよりはましでした。この日も決着はつきませんでした。それがそれでもなのです。

太郎の方が不利になつてきました。二郎もそれがわかつています。彼はとても嬉しそうな声でこう太郎に対して言うのです。

「明日こそ決着がつくね」

「ふん、負けないぞ」

太郎は言い返します。けれど声も明らかに弱っています。

「絶対にね。負けないからな」

「その傷で言うのかい？」

けれど二郎の言葉は余裕のあるものでした。

「僕はまた傷を癒せるけれど君は無理だろ」

「ふん、それは」

「いいや、そうだね」

その誇らしげな声での言葉でした。

「明日こそは僕がね」

「絶対に負けないからな」

太郎はその二郎に言い放つてそれで別れます。しかしです。

不利は明らかでした。太郎も実際弱つています。

明日は本当に負けるかも知れない、そのことを思いながら家に帰ります。そうして帰り道を歩いているとです。急にお腹が空いてきました。

「ええと、何かあるかな」

蜜を探しますが周りにはありません。その代わりです。

木の下のに広い葉っぱが生えてきました。それを見るとです。

何か食べられそうな気がしてきました。太郎はふらふらとその葉っぱのところに来てです。そうしてその葉っぱを食べるのでした。

葉っぱを食べるとです。傷が見る見るうちに治ったのです。本当にあつという間に治ってしまったのです。

これには太郎も驚いてです。こう言うのでした。

「うわ、これは凄いや」

このことに大喜びです。そうして傷が癒えたことを喜んでそのまま寝たのです。

そして次の日喧嘩の場所に行く予定です。二郎はもう来ていました。彼は太郎の姿を見るとです。今度は彼が驚きの言葉をあげました。

「えっ、まさか!？」

「あれっ、何かあつたのかな」

「まさか君もオオバコを食べたのかい？」

「オオバコって？」

「あの草のことは僕だけが知ってる筈なのに」

「こう言うのです。」

「それでどうして。君が」

「ああ、成程ね」

二郎の言葉を聞いてです。太郎もわかったのです。

「君もあのオオバコを食べていたんだね」

「そうだよ」

二郎は忌々しげに太郎に対して答えます。

「その通りだよ」

「やっぱりね。そうだったんだね」

「まさか君もなんて」

また言う二郎でした。

「傷が治るなんて」

「いや、偶然食べたけれど」

太郎は傷が治っただけでなくて二郎が慌てているのを見てです。笑顔になります。

そうしてそのうえで彼に対して言います。

「さて、それじゃあね」

「喧嘩の続きをするんだね」

「これで負けないからね」

「ふん、傷が治ってもだよ」

二郎もその太郎にムキになって言い返します。

「それでも僕だって」

「負けないっていうんだね」

「負けてたまるか」

負けじ魂も見せます。

「君が悪いんだからね」

「いいや、僕は悪くないよ」

口で言い合いながらまた喧嘩をする彼等でした。そしてです。

一週間も続けたところで。二郎が言ってきました。

「もういいんじゃないかな」

「喧嘩？」

「そうだよ。どっちがいいか悪いかなんてさ」

「どうでもよくなってきたんだね」

「そうだよ。だからいいんじゃないかな」

こう太郎に対して言います。

「もうさ」

「そうだね。そもそもだよ」

「うん、そもそも？」

「喧嘩の理由覚えてる？」

太郎はこのことを二郎に尋ねました。

「君、覚えてる？」

「あれっ、そういえば」

言われてみればです。二郎もです。

どうして喧嘩になったのか覚えていません。すっかり忘れてしまっていました。

そのことに気付いてです。あらためて太郎に言います。

「覚えてないよ、僕も」

「そつだよね、それじゃあ」

「もういいか」

「そつだね」

お互い言い合うのでした。

「もう喧嘩は止めて」

「仲直りしようか」

「そつしよう」

こうして彼等は喧嘩を止めて仲直りをしたのでした。そして仲直りをしてから二匹でオオバコを食べて傷を治したのです。そのオオバコはとても美味しいものでした。

オオバコ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6028q/>

オオバコ

2011年2月2日22時52分発行